『マフフーズ・文学・イスラム——エジプト知性の閃き』

八木久美子著

第三書館　二〇〇六年九月二〇日

本書は、一九八八年にノーベル文学賞を受賞し、現代アラブ文学を世界文学に押し上げたエジプトの小説家ナギーブ・マフフーズ（一九一一—二〇〇六）を論じた待望の本格的な研究書である。

アラブ文学にはほとんどなじみのない評者に読み通せるかどうか最初不安がなかったわけではない。しかし、いざ読み始めてみると引き込まれるようにして知的刺激に満ちたこの書物を一気に読み終えることができた。

本書は、「あとがき」によると、二〇〇一年にハーバード大学に提出した博士論文を日本語に翻訳し、加筆訂正したものとのことで、さらに「アラブの近代小説、あるいは近代思想に親しんでいない読者を想定し、歴史的な背景や思想的系譜についての説明を増やす一方、本来宗教学の論文としてかなりの部分を占めていた神秘主義や宗教と集団アイデンティティーについての専門的な議論は削りつつ、マフフーズという一人の人間ができるだけ浮き彫りになるよう体裁を整えた」との配慮が払われた上での刊行であることを知る。この気配りのお陰で、アラブ文学の世界的作家を論じた本書をアラブ文学に疎い評者が知的興奮を味わいつつ読み終えることができたのは幸運であった。

本書は、序章に続き、本文四章の構成から成る。

序章では導入として、エジプトが近代化のプロセスで抱えた伝統と近代の統合、イスラム文明と西洋文明の相克、近代小説の形成といった問題が述べられる。

第一章では、「カイロっ子」マフフーズの誕生から小説家マフフーズの思想形成、創作活動をエジプトの社会状況、時代背景に目配せしつつ論じ、作品の効果的な引用によりその人物像に迫る。一九三〇年代に作家活動を開始するマフフーズが、自分が生きたカイロという世界と自らが熟知するカイロの人々を描くことで、作家としての才能を開花させ、初期の「歴史的作品」を経て、一九四五年から一九五七年にかけての「社会的作品」、その後の沈黙期間を挟んで、一九五九年から一九六六年にかけての「哲学的作品」、さらに一九七〇年代から一九八〇年代に書かれる、著者が敢えて呼ぶ「新社会的作品」へと続く一連の作品群が生み出される経緯が手際よく紹介される。

第二章から第四章でこれらの作品群から主に代表作を中心に取り上げ、見事な手捌きでの作品引用と解説によりマフフーズの思想の変遷と文学観の特質が浮き彫りにして示される。第二章での、生涯の師であるサラーマ・ムーサ（一八八八—一九五八）との出会い、「この出会いなしには、小説家としてのマフフーズもなければ、その思想の豊かさも得られなかった」との記述に関心が惹き付けられる。マフフーズはムーサか

ら社会主義、科学的精神、寛容の精神を学び取ったという。ここでいう社会主義とは倫理的な、穏健な改良主義的なものをさすようである。第三章では「哲学的作品」から『我が町内の子供たち』（一九五九）をはじめとして『ナイル川でのささやき』（一九六六）にいたる間の主要な諸作品を取り上げることでマフフーズの思想と文学観の深化が語られる。「哲学的作品」には「科学には答えられない問いの答を探し求めること、人生に一貫した意味を与えてくれる何かを追い求めること」がモチーフとして共通することが示される。これはスーフィズムの思想を基底とする。スーフィズムについて著者は、「コーランを別とすれば、イスラム教徒の生んだもっとも豊かな文学世界がスーフィズムから発生したというのは、それはスーフィズムが個人の精神、魂の自由な飛翔を可能にし、それを通して真実性、神に近づくという道を用意したからではないだろうか」と文学とスーフィズムの関わりを語りかける。だが一方で、『我が町内の子供たち』は反イスラム的とみなされ、本書の序章冒頭で述べられているように一九九四年のマフフーズ暗殺未遂事件を引き起こすことにもなる。第四章ではマフフーズの思想的変遷が到達した「社会主義的スーフィズム」について語られる。要点として、やや長くなるが著者の言葉を引用する。

> マフフーズにとって「神を求める」という行為は、決して世俗を見おろして、世俗への関心をなくしてしまうことを意味するのではなく、神の意志を少しでも正確に理解し、それを社会のなかで可能な限り実現しようとすることに他ならない。有限なる人間が超越者の意志を理解し、実現しようとするこの作業には終わりなどあろうはずもなく、生きている限り永遠に続けられなければならない厳しい性格のものである。しかしマフフーズは、すべての人間がこの作業に参加することを求められているとし、そうすることによって人間は理想社会に近づくことができると考えるのであった。こうして社会主義はイスラム教徒の信仰と結びつき、それはマフフーズが「社会主義的スーフィズム」と呼ぶものになる。（348）

マフフーズはこの思想を「哲学的作品」および「新社会的作品」において具体的な形として提示することを実践した。

マフフーズは大きな文学的足跡を残して二〇〇六年八月三〇日に九四歳の生涯を閉じた。それからほどなくして上梓された本書はその明晰な文体によって、マフフーズの人間像をくっきりと浮き彫りにしてその足跡の大きさを改めて語りかけてくれる。

著者八木氏の真摯な探求の結実である本労作が、日本のアラブ文学研究のさらなる推進に大きな貢献をなすものと確信する。

また、国際学術交流の点からも、英文の原著博士論文の一日も早い公刊を待ち望みたい。

（川口健一）